

やぶれ傘

一一二二号
二〇二〇年二月



おのづから醤油を弾く寒卵	根橋宏次
山羊の名はツヨシとモモコ日脚伸ぶ	大島英昭
縞々のトートバッグで毛糸帽	青谷小枝
綿虫と同じ日向に電車待つ	さくちきみえ
白い日がいま冬雲に入るところ	藤井美晴
餅花のひとつに触れてみな揺らす	廣瀬雅男
乾門出れば石路咲くお濠端	瀬島酒望
空くを待つ立ち食ひ蕎麦屋雪催	丑久保 勲
霜柱何が何でも踏んでみる	安藤久美子
白菜の尻を落して呉れにけり	白石正躬
数へ日の岩に据わりし石祠	渡邊孝彦
庭隅へ日のうつりゆく寒牡丹	秋山信行
絵に描いたやうな雲浮く春隣	小山よる
朝刊は休みなりけり葛湯飲む	天野美登里
短日の厨の換気扇磨く	有賀昌子

抄 集 句 傘 大 崎 紀 夫 選

初笑ひ口にスイスのチョコレート	松村光典
冬の月一の鳥居の貫ひかる	萩原溪人
賀状書く学友二人星となり	橋本美代
引きずられ引きずられ行く千歳飴	広瀬 濟
骨壺を納めし寺の柿たわわ	増田裕司
あと一段もう一段と毛糸編む	山本久枝
当たり矢の音はね返る弓始め	石原健二
琴の音の流るる店に福袋	稲田延子
セーターを先づかぶる派と腕から派	岩藤礼子
寒に入る居間に昔の聴診器	木村瑞枝
電灯の紐カチと引く冬の夜	倉澤節子
論客を迎へちり鍋煮立ちをり	小巻若菜
駒台に歩兵一枚山眠る	竹内文夫
銀屏風に父の落書き残りをり	柴崎和男
手水舎の柄杓まつさら淑気立つ	貫井照子

雪間草

大崎紀夫

落葉焚きをりうどん屋へゆく途中
川漁の船枯蘆をこすりゆく
小春日の庭で大笹叩きをり
川岸の岩の凹みに昨夜の雪
菊を焚くけむりが道に出てきたる

晴ればれとメタセコイアの冬紅葉
裸木の枝に雀がわつとゐる
坂下の鯛焼き屋まで下りけり
この朝のふくら雀が七八羽
雪くるといふ日の薄日差しにけり
冬ざくら坂の日向はぬかるんで
空晴れてゆく昼過ぎの雪間草

寒卵

根橋宏次

冬霞膳所のあたりにさしかかり
 信金の前に葉牡丹据ゑらるる
 朝市に菜つ葉が売られ雪がふる
 ぽつぺんの吹かれながらに売られぬる
 見て取れるほどに散らばり寒雀
 水仙の花のかたへに魚干され
 暖房車川渡るとき湖見えて
 柵にたまる落葉へふる落葉
 おのづから醤油を弾く寒卵
 冬萌を歩くときたま雲を見て

寒肥

大島英昭

マフラーを二重に飯田橋あたり
 降りたての木の葉の浮かぶこもり沼
 十時頃回覧板と賀状くる
 廃屋のひとつに山茶花がまつ赤
 裸木に当たる入り日のきれつ端
 霜あとの地表めくれてびらびらと
 山羊の名はツヨシとモモコ日脚伸ぶ
 びつしりと闕伽桶柄杓雪もよひ
 寒肥のぼちぼち白き植木鉢
 春近し土手の向うに電波塔

隣は更地塀際の石露の花
居酒屋の棚にずらりと冬帽子
冬の夜の布団の中の足の先
綿虫と同じ日向に電車待つ
裸木の日暮れの色となりけり
生命線の先のうやむや年詰まる
つやつやとして大寒の霊柩車
寒鯉の小石の音に少し揺れ
湯豆腐の鍋の真上に蛍光灯
セーターに虫食ひのあともうひとつ

綿虫

きくちきみえ

三日

青谷小枝

その先に海ある枯野道に行く
見上げれば冬空傾ぐかに東塔
立ちしまま鶏頭枯るる一並び
縞々のトートバッグで毛糸帽
とろとろと柚子味噌練つてゐる雨夜
冬の夜のメトロノームをなんとなく
吹き抜けのロビー真中に灯の聖樹
かき揚げを足して蕎麦喰ふ冬の暮
ひとつ浮く雲の真白き三日かな
冬灯木立の奥に児童館

裸木

藤井美晴

裸木が枝打ちされて棒となる
道端のあかのまんまのかへりばな
白い日がいま冬雲に入るところ
しはぶきが公民館の和室より
冬至の日雨降りながら暮れにけり
オリオンをヘリコプターの灯がよぎる
砂利道に柞落葉と鳥の羽根
川に雨川の向うに枇杷の花
枯れ芙蓉吹かれカラカラ日が照って
冬帽子押さへて渡る跨線橋

餅花

廣瀬雅男

鶏頭の枯れて残りし紅の色
湯豆腐や一人の酒はゆるゆると
冬山に夕日の沈むところかな
部屋中に日差しの届く大晦日
母が子に読んで聞かせる初みくじ
ザック背に妻の出かける福詣
その辺を散歩してくる二日かな
建売の旗に風来る六日かな
餅花のひとつに触れてみな揺らす
蠟梅の向うまさをな空がある

石 落

瀬 島 酒 望

冬の夜ちよいと寄り道したくなり
 鯛焼きを手に腹ばひで地図拵げ
 水際まで降りて鯉見る冬紅葉
 乾門出れば石落咲くお濠端
 洋館の一家は帰国枇杷の花
 都鳥水上バスは向きを変へ
 お参りへ羽子板市を通り抜け
 ちぎれたるのが薄れゆく冬の雲
 三階の窓で見えてゐるはしご乗り
 飾りけり手に乗るほどの獅子頭

雪 催

丑 久 保 勲

諸蔓焼く人は畑にしやがみゐて
 甘柿と種はスパッと切れてゐる
 風花の見える窓辺でジャワカレー
 石落の花庫裡に梯子が吊るされて
 数へ日の二階の席で聴く第九
 一歩ごと破魔矢の鈴は音立てて
 買ひ初めは散歩帰りの豆大福
 目出度さの残る五日の喫茶店
 棟上げの宴は六名日脚伸ぶ
 空くを待つ立ち食ひ蕎麦屋雪催

冬鳥

安藤久美子

冬枯れの庭に朝日の射し込んで
霜柱何が何でも踏んでみる
蜜柑剥く皮は海星の形して
薄紅のリップクリーム霜の朝
初明りベランダへ出て深呼吸
初空を飛行機雲の一直線
門松の街をぶらりと神社まで
珈琲に餅を二つといふ昼餉
初場所の喚声液晶テレビより
冬鳥が来てゐる庭の空に雲

白菜

白石正躬

小春日の川辺の空の鳶の声
冬の土手もの焚く煙這ひ上がる
夕闇に水仙ゆるる渡船小屋
枯れ枝を通して山の小屋が見え
山祇の社を囲む冬木の芽
白菜の尻を落して呉れにけり
沼めぐる休み所の冬桜
陽だまりの椅子に手袋置き忘れ
枯れの中渡良瀬川の水光る
うすうすと風来る河原冬銀河

冬木立

渡邊孝彦

送電塔 囲む 金網 蔦 枯れて
目一杯 絵馬の 掛けられ 神迎
手分けして 藁敷く 作業 冬菜畑
冬木立 坂道に 空広が つて
公園の 聖樹を 眺めながら 行き
悉く 裸木と なり 青信号
数へ日の 岩に 据わりし 石祠
空風の こゑが 木立を 抜けてくる
バス 停まり 鉄塔上 に 冬の月
晴れきつて 枝垂れ 桜の 冬木の芽

寒牡丹

秋山侶行

ひろびろと 風吹くところ 麦芽ぐむ
行くほどに 吊橋 ゆれる 溪紅葉
山もみぢ 寺の 藁のすこし 見え
石段に 石段 つづく 木の葉雨
木道の 真すぐ つづく 枯蓮
西口に タクシー ひろふ 寒の夜
庭隅へ 日のうつり ゆく 寒牡丹
航跡の ゆらぎ 残れる 鳩の湖
冬うらら 腰に ゆれゐる 万歩計
地に ひくく 雲の たなびく 初あかね

春隣

小山よる

段ボールばかりの部屋に冬日差
冬灯ちかちかとしてふいに点き
コーヒーのヒの字点滅する師走
煤払してゐるらしき上の部屋
寒き夜の新幹線が過ぎて行く
年の瀬の窓にへりコプターの音
冬帽を被るまあるき頭かな
冷めし茶は冬日にあたりながら飲み
起き上がり蒲団の柄を眺めゐる
絵に描いたやうな雲浮く春隣

葛湯

天野美登里

木守柿今日は新聞休刊日
数へ日の軒下の猫背伸びして
夫留守の夕餉は早し滑子汁
居酒屋の古びしメニュー味噌雑炊
空店舗前にテントの年の市
朝刊は休みなりけり葛湯飲む
左義長や河原で猫の争へる
海岸に小さき波くる初日の出
着ぶくれて野菜手に売る農夫かな
三十三才川面の日差し纏れゐて

短日

有賀昌子

露座仏の螺髪鈍色秋深む
日めくりのあとわづかなり木の葉髪
冬帽子目深にかぶる暮るる街
両手挙げ子はオリオンを取るしぐさ
寒晴れの皇帝ダリア聳え咲く
鉄筋の揺れる骨組み冬ざるる
茶の花や螺子巻けば馬車回りだす
短日の厨の換気扇磨く
日の短か背伸びしながらバスを待つ
数へ日に柿磨かれて届きけり

初笑ひ

松村光典

消防車野分の中へ消えにけり
わが庭の皇帝ダリア雨に咲く
空深き桜もみちの並木道
飽きもせず落ち葉のかたち見つめをり
冬うらら友の車でうとうと
咳の声あちこちにある喫茶店
竹刀担ぎ枯れ木ばかりの並木行く
ひもすがら寒さの染みるソウルかな
電柱でふた声みこゑ初鳥
初笑ひ口にスイスのチョコレート

◇3月・4月の句会案内

月	日	時	句会名	会場	連絡先
3月	3日(火)	AM9:00	こなから会	あいバル	WEP編集室
	3日(火)	PM6:00	うらら会	浦和コミセン1	瀬島 孟
	4日(水)	PM7:00	ぎんなん会	浦和コミセン3	丑久保 勲
	6日(金)	AM10:00	NHK大崎教室	さいたまアリーナ	NHK文化センター
	6日(金)	PM6:00	なごみ会	武蔵浦和コミセン	丑久保 勲
	21日(土)	PM2:00	セニヨリータ句会	WEP俳句教室	藤井美晴
	28日(土)	AM10:00	楽天会	あいバル	廣瀬雅男
	28日(土)	PM2:00	やぶれ傘句会	WEP俳句教室	WEP編集室
4月	3日(金)	AM10:00	NHK大崎教室	さいたまアリーナ	NHK文化センター
	3日(金)	PM6:00	なごみ会	浦和コミセン3	丑久保 勲
	6日(月)	PM7:00	ぎんなん会	浦和コミセン1	丑久保 勲
	7日(火)	AM9:00	こなから会	あいバル	WEP編集室
	7日(火)	PM6:00	うらら会	浦和コミセン2	瀬島 孟
	18日(土)	PM2:00	セニヨリータ句会	WEP俳句教室	藤井美晴
	19日(日)	AM10:00	吟行会(下記注)	横浜・三溪園	丑久保 勲
	25日(土)	AM10:00	楽天会	あいバル	廣瀬雅男
	25日(土)	PM2:00	やぶれ傘句会	WEP俳句教室	WEP編集室

〔注〕ぎんなん会は奇数月は第1水曜、偶数月は第1月曜です。

3月のなごみ会は武蔵浦和コミセンです。

4月19日(日)の吟行。集合は10時。

集合場所はJR根岸線・根岸駅改札口。(横浜駅から五つ目)。

吟行地は三溪園。

句会場は神奈川近代文学館。(港の見える丘公園)

◎連絡先 瀬島 孟 ☎ 048-862-2757 藤井美晴 ☎ 0422-55-2733
 大島英昭 ☎ 048-592-5041 WEP編集室 ☎ 03-5368-1870
 廣瀬雅男 ☎ 048-443-7522 丑久保 勲 ☎ 048-853-3856